

梗間 剛 (著)

国家試験にも臨床にも役立つ！ リハビリ PT・OT・ST・Dr. のための 脳画像の新しい勉強本

宮 本 礼 子

(首都大学東京大学院 准教授, 作業療法士)



リハを組み立てるために必要な情報の中でも、脳画像情報の理解と応用に関しては、苦手意識をもつ作業療法学生や新人は多い。私が作業療法学生だった十数年前、画像から読み取る情報は損傷部位と損傷範囲、その部位が担う機能の低下を推察することであった。王道といわれてきた脳機能の基礎知識は、研究手法の進歩にともない続々と書き換えられ、現在、想像以上に私たちに多くの情報を提供してくれるようになっている。たとえば近年、脳機能は脳部位と1対1対応で考えるのではなく、情報処理ネットワークと捉えていくことが推奨されている。本書は、脳の解剖学的部位の同定方法だけでなく、脳機能情報の温故知新や最新の情報処理ネットワークについても非常にわかりやすく、かつ実践的なかたちで解説している1冊である。

筆者の梗間 剛氏は現在、一般社団法人 iADL の代表理事を務められるかわら、高次脳機能障害の方の地域生活における課題に関し、全国各地で数々のご講演を展開している。また臨床医師としてのご経験を基に、多くの脳機能に関する専門書籍を執筆されている。本書を含む梗間氏の書籍に共通するのは、その書籍を手取る

読者の視点に徹底的に寄り添っているという点だろう。たとえば、最新知見に触れる機会の少ない者にも理解しやすいよう、①マンガによる解説やクライアントの画像情報、経時変化に関する考察等を多数掲載している点、②若者になじみやすい QR コードを用い、画像情報を無償でダウンロード可能としている点、③学生～新人臨床家・ベテラン臨床家に解説を分けて記載している点、等に、従来の書籍とは一線を画す斬新さを感じる。特に③に関して、どこまで理解しておく必要があるかの目安が提示されていることは、読者の学習意欲を引き出す意味をもつ。もっと学びたい学生には、臨床家の目線を提供することでその学習意欲を高める効果ももつだろう。養成校で学生教育に携わる立場の私は、本書を通し学生の主体性を引き出す方法をたくさん学ぶことができた。さらに、筆者が本書冒頭で「画像を見なければ知りえない『リハビリテーションに必要な情報』を得るために、画像診断する必要がある」と述べているように、本書を用いてネットワーク研究をはじめとした最新知見を基に脳画像情報を正確に読み取り、職種間・施設間で共有することは、リハの質をより向上していくため

の重要な一歩になり得るだろう。

近年は SNS の普及にともない、クライアントが自分の感じたことや症状に関する考えを気軽に発信できるようになった。たとえば高次脳機能障害のような後天的障害のある方の場合、彼らは病前との比較から、自身の脳に生じた変化、それにとまなう行動や感情の変化を、さまざまなかたちで理解し、「今の自分とは」をさまざまな媒体で表現するようになっている。「自分に何が起きているのか」、「なぜ自分はこんな行動をとるのか」、という日常的なクライアントの疑問に共に対峙していくために、われわれリハ職種は日進月歩で発展する基礎知見の情報更新を止めてはならないと思う。

本書は、脳画像情報をリハに必要な情報として改めて捉え直し、見通しをもった支援を構築するための一助となるに違いない。クライアントの日常の疑問や課題に共に向き合う立場として、改めてご自身の知識の刷新に乗り出したいと思う方には、一度手に取ってほしいと思う1冊である。

B5 判 312 頁 4,000 円+税
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357